支援金事業完了報告書

日本財団　会長　笹川　陽平　殿

報告日付：2019年4月25日
事業ID：2018-A028-008
事業名：大阪府箕面市の第三の居場所
　　におけるイベント等の実施
団体名：特定非営利法人
　　トイボックス
代表者名：栗田拓　　印
TEL：050-3733-5544
事業完了日：2019年3月31日

1.事業目標の達成状況：
【申請時の目標】
① プログラミング教育の導入
② 課外活動（宿泊あり）
③ 課外活動（保護者参加型）

2.事業内容詳細：
① レゴプログラミング、エデュケーション教材の導入
② お泊り遠足（1泊2日旅行イベント）in 高知の実施
③ わくわく親子遠足（保護者参加型イベント）in 和歌山マリーナシティの実施

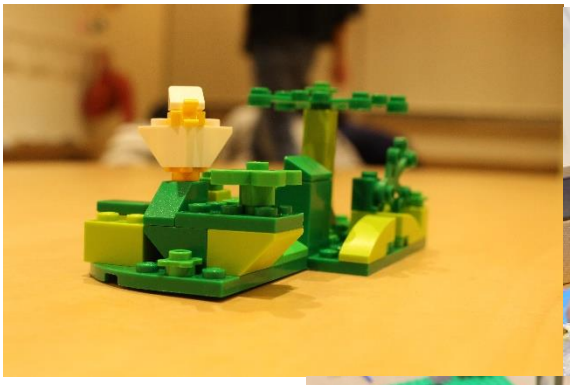
3.契約時事業目標の達成状況：
【助成契約書記載の目標】
① 教育用レゴブロックを使ったプログラミング学習の導入、それに伴う環境整備
② 公共交通機関を使用し、宿泊を含めた課外活動を行い、子どもたちに豊富な体験を提供する
③ 日帰りの遠足イベントを実施し、保護者の方に、家、第三の居場所を離れたところで子どもたちに接する時間を提供し、親子の絆を深め、スタッフとの関係づくりにつなげる

【目標の達成状況】
① レゴプログラミング、エデュケーション教材の導入

　みのお拠点では開設当初より、子ども達が育むべき非認知能力を「生き抜く力」と定義し、その力の育成のために、「わくわくたいむ」という体験学習の時間を設け、毎日様々なジャンルの体験をワークショップ形式で行ってきた。その中で子どもたちが大好きなレゴブロックが子どもたちの創造力、空間認識能力、ソーシャルスキルなどの発達に非常に効果的であることに気づき、レゴを使ったさらなるプログラムの導入を検討した。

　今回は一般販売されていないエデュケーション教材用ブロック、タブレットを使用して自分の作ったロボットなどを実際に動かすことのできるプログラミング用教材を購入。わくわくたいむの中に「レゴクリエイション」という時間を設け、子どもたちのクリエイティビティを伸ばす取り組みを始めている。

写真1　わくわくたいむ「レゴクリエイション」の様子



② お泊り遠足 in 高知

実施日 ： 2019年3月27日(水)～28日(木)

行き先 ： 高知県室戸市

（参加児童の人数を踏まえ、行き先を東京から高知へ変更）

・安芸水産（ちりめんじゃこ工場見学）
・室戸青少年自然の家（体育館遊び、キャンプファイヤー、宿泊）
・室戸ドルフィンセンター（ドルフィンスイム体験）
・カツオのたたき作り体験
・砂浜、広場での外遊び

交通手段 ： 飛行機、貸し切りバス

参加人数 ： 子ども 14名

初めての宿泊イベント「お泊り遠足」実施にあたっては、事前のわくわくたいむ（体験学習の時間）を使い、高知県についてグーグルアースなどを使って学ぶなど、方言や文化に関する映像などに触れ、事前学習を行ったことで、子どもたちの興味関心を引き出した上で体験に臨んだ。

当日は慣れない空港でのマナーや搭乗手続きもしっかりとこなし、無事高知県に到着。子どもたちは豊かな自然を前に、心から楽しんでいた。最初に向かった砂浜では、普段満足いくまで外遊びを出来ない子どもも多いため、どこまでも続く海岸線に大はしゃぎで、たくさんの笑顔が見られた。その後安芸水産さんにお世話になり、ちりめんじゃこを作る様子の見学や、じゃこについてのお話を聞かせていただ

き、そこでお昼をいただいた。

写真1 安芸水産での工場見学＆ちりめんじゃこについてのお話

出発前には魚介類の苦手な子どもが多く「（じゃこは）絶対食べない！」と言う子が多かったが、実際現地に足を運び、観察することで興味が沸き、自分から「食べてみる」と、全員が生しらすの試食にチャレンジ。「美味しい！」と声が上がり、あらためて「本物に触れること」「食育の大切さ」を痛感する場面となった。

また今回の旅では、それまでの課外活動で課題となっていた「しっかりとした挨拶」や「周りの人、モノ、生き物を大切にする」などのテーマについても、事前に一緒に考える機会を作ったりしたことにより、当日は子どもたちが自主性を持って、お世話になる方々に挨拶をしたり、お礼を言う姿が見られ、成長を感じた。

貸切バスで宿泊地「室戸青少年自然の家」へ移動。到着後は体育館で思いっきり走り回り、それぞれが好きな遊びをし、夜はキャンプファイヤーでレクリエーションなどをして楽しんだ。就寝準備にあたって、自分たちでシーツをしくなど「青少年の家」では学びも多くあり、よい体験となった。夜は保護者の方と離れての慣れない体験で少しホームシックになる子もいたが、友だちやスタッフと過ごす特別なお泊りを楽しんでいる様子だった。

写真2 室戸青少年自然の家での様子

2日目はお世話になった宿舎を後に、イルカとの触れ合いのためドルフィンセンターへ。子どもたちが最も楽しみにしていた体験で、彼らの目がキラキラ輝く様子を見られ、スタッフにとっても実り多い時間となった。ドルフィンタッチやふれあい体験では全員がイルカに触り、その感触や息遣い、動きを間近で感じることができたようだった。自分の指示に応え、イルカが技を披露してくれる姿は子どもたちにとってとても心躍る体験だったようだ。

写真3 イルカたちと触れ合い、多くのことを学んだ

その後は実際に海に入ってイルカたちと泳ぐドルフィンスイムチームと、みんなのお昼ご飯になる「カツオのたたき」作りチームに分かれ、体験を行った。

写真4 カツオのたたき作り体験

ここでも、生魚が苦手な子どもたちが多い中、新鮮なカツオと伝統の調理法に触れ、興味を持つことで苦手意識を乗り越え、チャレンジする子どもが多く、「体験」を通して学ぶことの大切さを改めて感じた。

写真5　都会を離れ大自然の中で思い切り遊ぶことができた

帰阪後、保護者の方からも「とても楽しかったようで、家でいろんな話をしてくれました」「飛行機を怖がっていたのにみんなと一緒で楽しく乗ることができました」などお喜びの言葉をいただいた。ケガが病気もなく、無事終えることができ、スタッフと子どもたちとの絆も深まる良い旅となった。

③　わくわく日帰り親子遠足

実施日　：　2019年1月19日(土)

行き先　：　和歌山マリーナシティ

（現地までの移動、園内の混雑などを鑑み、ユニバーサルスタジオジャパンから変更）

交通手段　：　貸し切りバス

参加人数　：　子ども　13名（うち2名は未就学児兄弟）保護者　5名

天気に恵まれ、有意義な一日となった。朝から貸し切りバスで約2時間和歌山へ移動。道中はバス内で楽しいレクリエーションを行い、普段拠点内でどのように子どもたちとスタッフが過ごしているか、という雰囲気を保護者の方に味わっていただきながら、安全かつ円滑に目的地までの時間を過ごすことができた。子どもたちにとって初めての遠出、テーマパークということで、前日にはチームごとに事前作戦会議を行い、どのように園内を回るかなどを話し合う時間を設けた。子どもたちは自分のやりたいこと、乗りたいものを挙げながらも友達の意見を聞き、こちらの設けたルールを守りながら楽しく回るためにそれぞれが考えながら発言しており、成長を感じた。当日は目を輝かせながら生き生きと楽しむ子どもたちと、それを見守る保護者の方も、童心に帰り子どもたちと一緒に楽しんでいる姿が見られた。また園内を回りながら普段なかなかゆっくりと保護者とお話する機会のなかったスタッフもコミュニケーションを取ることができ、子どもたちへの理解を深めるよい機会となった。また今回はお金の使い方について、子どもたちと一緒に考えながら、お小遣いを大切に使って買い物をするという体験にも重きを置いた。ひとりひとりが真剣に考え、ショッピングを楽しんだ。今回一緒に来られなかったお父さん、お母さんや兄弟へのお土産に使う子どもも多く、そういった面でも子どもたちの新たな一面を見ることのできる時間となった。

遠足終了後には「遠足をきっかけに友だちとより仲良くなることができ、拠点に来るのが楽しくなった」という声も聞かれた。

写真3　青空のもと、親子の笑顔あふれる一日を過ごした

5.成功したこととその要因：
① レゴプログラミング
　普段の自由遊びでの子どもたちの様子を日々のミーティングやケース会においてスタッフ同士で共有し、子どもたちに必要な体験や学習内容について深く話し合う機会を定期的にもっていたため、レゴブロックを通しての体験が子どもたちの「生き抜く力」を育む機会になるという点に気づくことができた。また、保護者の方との会話の中で、習い事としての「プログラミング教育」への興味・関心をキャッチすることができ、導入の検討につながった。

② 課外活動（高知県お泊り遠足）
　これまでの課外活動の振り返りを生かし、事前にスタッフ間で綿密な計画、共有を行ったことにより、大きな事故、ケガなどなく無事終えることができた。高知県に土地勘のあるスタッフがいたため、スムーズな移動が可能となり、参加する子どもたちに合ったアクティビティを提供することができた。

③ 課外活動（和歌山親子遠足）
　事前のリサーチを徹底したことで、現地までの移動手段や混雑状況を考え行き先の変更を行うことができ、その結果保護者と子どもたち、スタッフがゆっくりとした時間の中でコミュニケーションを取る時間を持つという目的を達成することが出来た。

6.失敗したこととその要因：
　①～③の事業すべてにおいて、おおむね成功を収めることができたが、③の親子遠足時、途中で発熱してしまった子どもがおり、後半は医務室で過ごすこととなった。朝の出発時には問題なかったが、子どもの体調が変わりやすい点、熱があっても気持ちが高まっていると元気にふるまってしまう点などを踏まえ、②のお泊り遠足時には検温を徹底し、子どもたちの体調管理を万全に行うことが出来た。
7.活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案：
　今回の支援金事業では子どもたちが普段できないようなさまざまな体験を通して、感じ、学び、自分で考え、行動する中で成長し、「生き抜く力」を身につけてほしいという目標があった。スタッフにとってもこの3つの活動は子どもたちについての理解をより深める機会となった。中でもお泊り遠足ではいくつかの課題が見つかり、今後の活動に生かしたいと考えている。

　・1年生から6年生まで全員が同じ行程、プログラムで活動したが、子どもたちの体力差の考慮が甘かったため、疲労度、歩く速度などに差が出てしまった。

【対応策】全体的なスケジュールにゆとりを持ち、徒歩での移動は低学年高学年でチーム分けをする、休憩時間を多めに設定する、などして調整を行う。

・宿泊先の情報把握が不十分だったため、予定外の清掃や寝具の片付けなどの作業が発生し、スタッフの休息時間を十分にとることができなかった。
【対応策】事前に宿泊先との打ち合わせを密にし、また可能な限りの現地下見を行う。

事業成果物:
【成果物の名称】事業完了報告書

【成果物がアップロードされているCANPANのURL】